

Title	ヨーロッパ思想と霊性（スピリチュアル・ケア研究：共同研究報告）
Author(s)	齊藤, 伸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-3 : 15-16
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2648
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE



金子晴勇 聖学院大学大学院客員教授

【スピリチュアル・ケア研究】
「ヨーロッパ思想と靈性」

2010年10月14日、聖学院大学上尾キャンパスにおいてスピリチュアル・ケア研究会が開催された。出席者21名のもと、同大学大学院客員教授の金子晴勇氏により上記の表題について発表がなされた。以下、金子氏による発表を要約する。

金子氏は長年に渡ってヨーロッパ思想を縦断的に研究され、思想史において「靈性」(spirituality)が重要な役割を果たしていることを見出した。同氏が言うところの「靈性」とは、何か特定の宗教だけに限定されるものではなく、それは人間一般に普遍的に与えられている魂の能力を意味している。そのためそれは現代の日本人にとってもまた無縁なものではない。しかしながら金子氏は、明治維新以降「日本におけるこれまでのヨーロッパ

思想の受容は生命の根源である靈性を除いた、亡霊となった屍を有り難く採り入れたにすぎなかった。したがってヨーロッパ思想の生命源である靈性を学び直すことは今日きわめて重要である」と主張する。そこで同氏は日本における靈性思想の先駆的業績として鈴木大拙の『日本的靈性』から出発し、エックハルトの影響を受けた西田幾多郎の『場所的論理と宗教的世界観』を考察する。鈴木と西田に共通する靈性の理解は、それらが精神と物質の二元論を克服するものとして捉えられていることである。だがこうした靈性理解はキリスト教的なものとはその意図において異なっている。同氏によると「キリスト教は根源的聖者イエスもしくはその使徒たちとの時空を超えた人格的な触れ合いを通して聖なるものを靈性が感得するのに対し、仏教では悟りが中心であるために知的な直観によって自然を超えた聖なる法を捉えることが目指される。そこから靈性の人格的情緒的側面と知的直観的側面との相違が明らかになる」。

「日本的靈性」との比較的考察によって、ヨーロッパの靈性を「人格的情緒的」と特徴づけた金子氏は、単にそれを実体として叙述することではなく、むしろその「機能」を問題にする。そして同氏によればヨーロッパの靈性からは3つの機能が見出される。すなわちそれは「感得作用」「超越作用」「媒介作用」である。第一の感得作用とは理性では捉えることができない対象を直観的に認識する機能であり、それは受動的に神を受け入れる機能である。第二の超越作用は実際の生活からの離脱、脱自、拉致という三段階の運動を引き

起こす作用であり、感性的なものから理性的なものへ、そして理性的なものから霊性的なものへと人間を超越させる。第三の媒介作用はキルケゴールの『死にいたる病』において明瞭に示されており、自己と神との関係が霊性を媒介とすることによって均衡を保っている。同氏によればそれは「統合機能」とも言い得る機能であり、今日とくに強調されるべきものである。この機能が無視されたり、また弱められたりすることはただ個人的な問題だけに留まらず、「世紀の病」としての無神論やニヒリズムを引き起こすと同氏は言う。我々は無限なものと有限なものとを明確に区別しなければならず、有限なものを「偶像化」することは心身の均衡を破壊しかねない。そのため金子氏は金銭などの「ものの虜」となるということで起こる単なる競争原理に従った生き方が心身相関を崩す可能性があることを指摘し、「内なる霊性を正しく導く」ことの必要性を強調した。

(文責：齊藤 伸 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)

(2010年10月14日、聖学院大学1号館セミナー
ルーム)